no.31

CLCからしだね書店便り

July 2023 7

＊今月のご案内＊

① 読書感想本『非暴力の教育—今こそ、キリスト教教育を！』

② 座談会
「宗教二世」と
「クリスチャン家庭の子ども」
について考える〈Part.3〉

CLCからしだね書店では…

1. キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
2. お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
3. ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
4. コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
5. 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、お好きな本を手に取ってお読みください。
6. 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
7. 読書会や著者を招いての講演会など、人と人とが出会い、つながる「対話」の場を提供します。

CLCからしだね書店＆カフェ トライアングル
営業時間　11:00~17:00
定 休 日　日曜日と年末年始（※祝日も営業）
　　毎月第３木曜日は書店のみ営業

⚠ご注意

最近「ミッションからし種」という名前の団体が各地で活動されていますが、当法人とは一切関係ありませんのでご注意ください。 社会福祉法人ミッションからしだね

こどものための神のものがたり

語る人：大頭　眞一

第７回　天からのはしご

ヤコブは　こわくて
ぶるぶるふるえていました
おにいさんのエサウをだまして
ひどいめにあわせたことがあります
エサウはまだ怒っているでしょう
神さまは
そんなヤコブがいとおしくて
ヤコブのところにきてくださいました
「あなたのこわさ　あなたの苦しみを
　わたしにぶつけておいで」と
ヤコブは神さまに体当たりしました。
「ぼくはそんなにわるくない」
「母さんだって味方したんだ」
「だいたい兄さんがいいかげんだから」
わめきながら　神さまを押しまくります
神さまはヤコブをがっちりうけとめます
抱え込んで　抱きしめます
神さまのこどうを
ヤコブは感じます。
ドクッ　ドクッ　ドクッと
ヤコブをあわれみでつつむ　こどう
ヤコブはふっと力がぬけて
神さまにだきとめられました
なんだか、もうだいじょうぶだと
そう思いました

大頭　眞一　おおずしんいち

1960 年神戸市生まれ。英国マンチェスターのナザレン・セオロジカル・カレッジ（BA、MA）と関西聖書神学校で学ぶ。日本イエス・キリスト教団香登教会伝道師・副牧師を経て、現在、京都府の京都信愛教会と明野キリスト教会の牧師、関西聖書神学校講師、焚き火塾代表。ドリームパーティー発起人。

おとなのための　神の物語

子どもだったみなさんへ

●1
祈りとは、願いごとをかなえてもらうためにしつこく同じことを繰り返すことではありません。自分の心をそのままかみさまに持っていくことです。なにがほしいかわけがわからなくても。

●2
神さまは私たちが望む以上のものを与えてくださいます。敵からの守りを願う者には、和解を。不戦を求める者には友を。安全を求める者には永遠のいのちを。

●3
もちろん私たちはヤコブ以上に神さまを知っています。天からのはしごを降りて人となり、私たちのためにあたたかい血を流してくださったイエスによって。

和紙ちぎり絵：森住　ゆき　もりずみ　ゆき

群馬県生まれ。和紙ちぎり絵作家。著書に画文集「アメイジング・グレイス」「ぶどうの気持ち」「日めくり片隅の花でも」（いのちのことば社）、「思いを伝える和紙のちぎり絵春夏秋冬」（日貿出版社）がある。埼玉県在住。

「読書感想本」

「暴力」をとらえ直す

『非暴力の教育――今こそ、キリスト教教育を！』

小見のぞみ（日本キリスト教団出版局、本体１６００円＋税）

最近になって部活動での体罰や宗教二世の問題がメディアに頻繁に取り上げられるようになりました。しかし、「体罰の何が問題なのか」「宗教二世が侵害されている権利とは何なのか」といった、問題の本質にまで踏み込んだ議論はあまり聞かれません。こうした議論がなされない限り、センセーショナルな事件が起こるたびに一時的で感情的な反応が起こるだけで、根本的な問題意識が社会全体で共有されることはないでしょう。

ではこれらの問題の本質は何か。それは「暴力」ということの中にあると思います。「目的を達成する手段として暴力を使ってはいけない」とはたいていの人が同意する所でしょう。にもかかわらず、体罰やしつけといったことが問題になると、「ある程度は仕方がない」とか、「子どものためを思えばこそ…」といった理由で、そこで行われる暴力が例外的に認められることがあるのはなぜでしょうか。それは「暴力の何が問題なのか」、あるいは「そもそも暴力とは何を指すのか」といった本質的な理解がなおざりにされているからだと思います。

小見のぞみ『非暴力の教育』は、キリスト教教育のいくつかの説と一般的な教育観とを対比することによって、教育の現場において共有されるべき人間観・子ども観を提示します。そこで示された人間観・子ども観に基づいて初めて、暴力の本質や暴力の問題性が見えてきます。同時に、日本において子どもや女性に対する暴力が深刻な問題としてとらえられてこなかったのも、こうした人間理解が欠如しているからだということが分かります。

ではキリスト教教育は、どのような人間理解をこの社会に提示することができるのでしょうか。そのことを考えるために、著者はまずイエス自身が子どもをどう見ていたのかに着目します。著者によると、当時のユダヤ社会が民族や社会全体の将来的な繁栄に役立つものとして子どもを見ていたのに対して、イエスは、すでにそれ自身で価値のあるものとして（何かに役立つものとしてではなく）子どもを見ていました。そしてこのような見方は、子どもだけでなく、当時の社会で、しいたげられ、価値がないとされていた人々すべてに及びます。こうして、すべての人が何らかの目的に対する手段としてではなく、それ自身として価値を持っており、その価値を守るために侵してはならないものとして、主体性や人権や尊厳というものがあるという思想が生まれます。暴力とは、この価値を侵す力にほかなりません。

このように考えると、教育の場では、あからさまな暴力や虐待だけでなく、様々な見えにくい形をとった暴力も横行していることが分かります。それは「キリスト教教育」が行われている教会においても起こっていることです。子どもたちを親や教師の理想通りにしたいと考える熱心な大人たちが、子どもたちを「クリスチャンにする」。いったん「クリスチャンになった」子どもたちを、そこから離れないようにつなぎとめる。そういう非常に操作的な教育が、教会において行われていないでしょうか。著者はそのような教育を、「獲得型・征服型の教育」（111頁）と呼びます。そこには親であっても侵すことのできない子どもの権利や主体性という視点が欠けています。

確かに、大切な子どもたちに良いものを伝えていきたいと思うのは自然なことでしょう。しかし、良いものだからと言って受け手を無視してそれを勝手に与えることができると考えるのは行き過ぎです。そうした考え方の背後には、他者の主体性を軽視する暴力的な人間観・子ども観があるのではないでしょうか。しかもそうした暴力性は、「子どものためを思って」という善意や優しさに隠れてしばしば見えにくくなってしまいます。そうした隠微な暴力性に気づくためには、私たちの持っている人間観を根本的に見直すことで、暴力の本質と深刻さを深く理解する必要があります。

すべての人間が持っていて、他者が侵してはならないもの。それは「尊厳」や「人権」など、見方によってさまざまな呼び方があるでしょう。いずれにしても、そういうものを侵すことが暴力であり、そのことに無頓着であることが暴力性だとするならば、この見方は、現在この世界で大小様々な規模で行われている暴力を、一つの視座のもとにとらえることを可能にします。たとえば「子どものためを思って」なされる体罰と、「自由を守るため」になされる戦争との間には、規模の大きな違いにもかかわらず、その考え方に共通するものがないでしょうか。どちらからも、「一人一人の人間が持っている、侵してはならない価値」といったものに対する非礼や敬意の無さ、厚かましさや尊大さが感じられます。

本書を読むと、教育や保育の場における暴力がもたらす深刻な影響を考えさせられます。将来の社会において基本的人権や個人の尊厳といったものの理解が進むかどうかは、教育者が、それらを否定する力としての暴力をきっぱり拒否できるかということと、深くかかわっているからです。だからこそ著者は言います。

> わたしたちは、自分のなかにある力を暴力的に使うことがあります。人や自分自身を傷つけたり、支配したり、排除したり、虐待したり、貶めたりする。これが、マイナス方向への力の使い方であり、戦争をはじめとする悲惨な結果と破壊を世界にもたらします。教育は、人を傷つけ、分断し、震えあがらせる、このような暴力的な力の使い方をしてはいけないし、教えてはいけないのです。
> 世間や社会が、また一般の教育が、強い力をもって他者の上に立ち、世界を征服する権力をもてはやしたとしても、キリスト教教育は、そのような力の行使を認めてはいけない。（122頁）

教育の場において行われている暴力も、戦争などのより大きな暴力も、同じ人間観（あるいは人間観の欠如）から起こっていることなのかもしれない。本書を読んでそんなことを考えました。キリスト教教育の入門書ではありますが、暴力やその問題性について考えたい人にもお勧めできる一冊です。

【書店員　凱】

★良きサマリヤ人の「宿屋の主人」になる

配達員：「良きサマリヤ人」のたとえ話ですが、教会の中では、「良きサマリヤ人のようになりなさい」というふうに受け止めることが多い。でもそれはハードルが高い。サマリヤ人のようになれない自分がいて葛藤し、苦しいんです。でも僕は「宿屋の主人」ならなれる。これも教会ではよく言われることなんですが、「神様に委ねなさい」って。でも逆に神様も人間を信頼してくれていて、人間にいろんなものを委ねようとしてくれている。傷ついた人を助けて宿屋に連れてくるサマリヤ人がイエスで「私が治療費を出すし、この重傷を負っている人を介抱したってな。頼むで。まかしたで」って託される宿屋の主人が我々だと考えることもできるような気がします。そういうことが身の回りの暮らしの中にはあふれているような気がする。「あ、私は宿屋の主人なんや」と、そこにガーンと気づいてしまった人は、「これは神様から託されたことだから」と行動するし、それが周りから見たら「すごいな」と見えることもある。「これは自分が個人的に神様から託されたことやし。『頼むで』って神様に言われたことやし」ってそれだけで行動している人もたくさんいるように思います。宿屋の主人として、宿賃と介抱に必要なお金ももらった人が、その後どう行動するのか？「はい、わかりました。しっかり介抱します」と口では言っても、本当にちゃんと介抱するのか？「行動しか信じない」という中村哲さんの言ったことと通じるように思います。

コンチ：確かに、「宿屋の主人」って、教会ではほとんど無視されてますね（笑）でも「宿屋の主人」が私だと考えると、このイエス様の例話を自分のこととして理解できますね。

配達員：神様に委ねることよりは、神様から委ねられ、託されている事の方が圧倒的に多いし、そこに目を向けなあかんのちゃうかな？と思います。「神様に委ねる」という「信仰的」な言葉で、本当は神様から委ねられている、託されていることまで放棄したり、「きっと神様が守ってくださいますよ」という言葉をもって、重症を負った人から離れてしまうようなことをしがちなのではないでしょうか。

「キリスト教の異端」と「カルト」とを、どう分けて考えてきたか？

店長：いわゆるキリスト教会が「異端」としてきた統一教会やエホバの証人が、宗教二世問題として社会から問題視されていることについてなんですが、教会のホームページや伝道用のチラシで、「統一協会、モルモン教、エホバの証人とは違います」って書いてます。そしてそれは「キリスト教と名乗っているが、あきらかにキリスト教から外れている異端だから」という理由です。彼らを異端として「私たちは彼らとは違いますから」ということをことさら宣言してきました。彼らが社会的に引き起こす様々な問題、弱い立場の子ども達が傷ついていますよっていう立場から考えてきたことがあったのかな？もちろん、一生懸命に闘ってくださった教会やクリスチャンがいました。でも多くの教会やクリスチャンは、「異端だから」としか見てこなかったんじゃないか？そこをしっかり考えるのが「傷ついた旅人を託された私たちがどういうふうに行動するのか」ということにも関連してくるのかと思うんですけど。そのあたりどうでしょうか？

配達員：記者会見で統一協会の二世の人たちがしゃべっているのを聞いて、教会の中でも種類としては同じような思いをさせた人がいなかったかな、同じような感情を抱かせてしまったようなことって教会の中になかったかな、と思いましたね。教会の雰囲気、空気、実際の言葉の中で。

店長：今回の宗教二世問題で、社会が「宗教たたき」と言ってもいいぐらいの空気になってきて、「でもこれは私たちとは関係のない話です」って、聞き流してよいのか？これからの教会学校、地域の子どもたちに対して、私たちが「よいこと」として今まで通り続けていかなければならないことと、考えて見直していかないといけないところが、もしかしたら出てきているのではないか？そういう時代の要請―という言い方が良いのかわからないんですけど―を通して、わかりやすい形で神様が教会に教えようとしておられることをどう受け止めて、教会や、信仰者としてどう行動していくのか？今、厚労省が宗教二世問題に関して、全国の自治体にQ＆A形式の通知を出しています。これを読むと、私たちが教会の中でしていることも「虐待です」と言われるような微妙なことが含まれているような気もするんですね。「異端のやってることでしょ？私たちは正統派だから間違いない、関係ない」って言っていたらいつのまにか「あなた、それ虐待」って社会から訴えられることも出てくるんじゃないでしょうか。皆さんの所属している教会は、そこに危機感をもって話し合ったり「うちの教会、こういう部分はちょっと問題かもしれません」とか、そういう話題は出ているでしょうか？

全員：（考え込む…）

ブル：うちの地域では、集会案内の新聞折り込みを出すとき、「エホバの証人、統一協会、モルモン教とは一切関係ありません」という文を入れたら、受け付けてくれません。

全員：へーっ、そうなんですか！

ブル：もちろん手配りのチラシはいいんですよ。でも、新聞折り込みにしようと思ったら、受け付けてもらえません。「他宗教批判」と受け止められるのでしょうね。

れんこん：それは各新聞販売店の基準によるんじゃないですかね。

配達員：いち販売店が決めていることではないような気はしますが…

ブル：ごく最近になって、そんなふうに言われるようになったような気がします。

店長：なぜダメになったのか、その基準が知りたいですね。何がきっかけだったのか？

ブル：宗教に対して、とてもデリケートになってきているのかもしれませんね。

れんこん：医療従事者は、エホバの証人の輸血拒否の問題に向き合わなければいけない場面があります。だからエホバの証人のそういう教義に対しては困っています。でもそういう医療従事者でさえ、「キリスト教の人が、エホバの証人だけ異端と言うのはどうかと思う」っておっしゃいます。私たちが「異端」と言うのは、私たちが信じている世界共通のキリスト教の教えの根本に、相容れない教えを入れてくるからで、その理由でだけだと思うんですけど、クリスチャンじゃない人からすると、「宗教統計で同じキリスト教に分類されるのに、自分だけ正統派って主張する信仰はどうかと思う」って言われたことはありますね。

ブル：「聖書を学びませんか」と誘われて、たしてくれていて、人間にいろんなものを委ねようとしてくれている。傷ついた人を助けて宿屋に連れてくるサマリヤ人がイエスで「私が治療費を出すし、この重傷を負っている人を介抱したってな。頼むで。まかしたで」って託される宿屋の主人が我々だと考えることもできるような気がします。そういうことが身の回りの暮らしの中にはあふれているような気がする。「あ、私は宿屋の主人なんや」と、そこにガーンと気づいてしまった人は、「これは神様から託されたことだから」と行動するし、それが周りから見たら「すごいな」と見えることもある。「これは自分が個人的に神様から託されたことやし。『頼むで』って神様に言われたことやし」ってそれだけで行動している人もたくさんいるように思います。宿屋の主人として、宿賃と介抱に必要なお金ももらった人が、その後どう行動するのか？「はい、わかりました。しっかり介抱します」と口では言っても、本当にちゃんと介抱するのか？「行動しか信じない」という中村哲さんの言ったことと通じるように思います。

コンチ：確かに、「宿屋の主人」って、教会ではほとんど無視されてますね（笑）でも「宿屋の主人」が私だと考えると、このイエス様の例話を自分のこととして理解できますね。

配達員：神様に委ねることよりは、神様から委ねられ、託されている事の方が圧倒的に多いし、そこに目を向けなあかんのちゃうかな？と思います。「神様に委ねる」という「信仰的」な言葉で、本当は神様から委ねられている、託されていることまで放棄したり、「きっと神様が守ってくださいますよ」という言葉をもって、重症を負った人から離れてしまうようなことをしがちなのではないでしょうか。

「キリスト教の異端」と「カルト」とを、どう分けて考えてきたか？

店長：いわゆるキリスト教会が「異端」としてきた統一教会やエホバの証人が、宗教二世問題として社会から問題視されていることについてなんですが、教会のホームページや伝道用のチラシで、「統一協会、モルモン教、エホバの証人とは違います」って書いてます。そしてそれは「キリスト教と名乗っているが、あきらかにキリスト教から外れている異端だから」という理由です。彼らを異端として「私たちは彼らとは違いますから」ということをことさら宣言してきました。彼らが社会的に引き起こす様々な問題、弱い立場の子ども達が傷ついていますよっていう立場から考えてきたことがあったのかな？もちろん、一生懸命に闘ってくださった教会やクリスチャンがいました。でも多くの教会やクリスチャンは、「異端だから」としか見てこなかったんじゃないか？そこをしっかり考えるのが「傷ついた旅人を託された私たちがどういうふうに行動するのか」ということにも関連してくるのかと思うんですけど。そのあたりどうでしょうか？

配達員：記者会見で統一協会の二世の人たちがしゃべっているのを聞いて、教会の中でも種類としては同じような思いをさせた人がいなかったかな、同じような感情を抱かせてしまったようなことって教会の中になかったかな、と思いましたね。教会の雰囲気、空気、実際の言葉の中で。

店長：今回の宗教二世問題で、社会が「宗教たたき」と言ってもいいぐらいの空気になってきて、「でもこれは私たちとは関係のない話です」って、聞き流してよいのか？これからの教会学校、地域の子どもたちに対して、私たちが「よいこと」として今まで通り続けていかなければならないことと、考えて見直していかないといけないところが、もしかしたら出てきているのではないか？そういう時代の要請―という言い方が良いのかわからないんですけど―を通して、わかりやすい形で神様が教会に教えようとしておられることをどう受け止めて、教会や、信仰者としてどう行動していくのか？今、厚労省が宗教二世問題に関して、全国の自治体にQ＆A形式の通知を出しています。これを読むと、私たちが教会の中でしていることも「虐待です」と言われるような微妙なことが含まれているような気もするんですね。「異端のやってることでしょ？私たちは正統派だから間違いない、関係ない」って言っていたらいつのまにか「あなた、それ虐待」って社会から訴えられることも出てくるんじゃないでしょうか。皆さんの所属している教会は、そこに危機感をもって話し合ったり「うちの教会、こういう部分はちょっと問題かもしれません」とか、そういう話題は出ているでしょうか？

全員：（考え込む…）

ブル：うちの地域では、集会案内の新聞折り込みを出すとき、「エホバの証人、統一協会、モルモン教とは一切関係ありません」という文を入れたら、受け付けてくれません。

全員：へーっ、そうなんですか！

ブル：もちろん手配りのチラシはいいんですよ。でも、新聞折り込みにしようと思ったら、受け付けてもらえません。「他宗教批判」と受け止められるのでしょうね。

れんこん：それは各新聞販売店の基準によるんじゃないですかね。

配達員：いち販売店が決めていることではないような気はしますが…

ブル：ごく最近になって、そんなふうに言われるようになったような気がします。

店長：なぜダメになったのか、その基準が知りたいですね。何がきっかけだったのか？

ブル：宗教に対して、とてもデリケートになってきているのかもしれませんね。

れんこん：医療従事者は、エホバの証人の輸血拒否の問題に向き合わなければいけない場面があります。だからエホバの証人のそういう教義に対しては困っています。でもそういう医療従事者でさえ、「キリスト教の人が、エホバの証人だけ異端と言うのはどうかと思う」っておっしゃいます。私たちが「異端」と言うのは、私たちが信じている世界共通のキリスト教の教えの根本に、相容れない教えを入れてくるからで、その理由でだけだと思うんですけど、クリスチャンじゃない人からすると、「宗教統計で同じキリスト教に分類されるのに、自分だけ正統派って主張する信仰はどうかと思う」って言われたことはありますね。

ブル：「聖書を学びませんか」と誘われて、た

オンライントーク会
「宗教二世」と「クリスチャン家庭の子ども」
（Part3）最終回

このトーク会では、キリスト教家庭外からクリスチャンになった人を1世、クリスチャンの親に育てられた人を、2世、3世、4世…と呼んでいます

5月5日、からしだね書店ではトーク会を行いました。そのやりとりを3回に分けてご紹介しています。今回は3回目最終回です。2回目は、クリスチャン家庭で、子どもと親とが「信仰の継承」をめぐって、どんなやりとりをしているか、大人の言い分、子どもの言い分がいろいろ出てきました。その延長で、教会の抱える問題についても上がってきました。

またままじめに「聖書を学びたい」という気持ちがあって、それでエホバの証人に入っていった人だっているわけですしね。ただ「異端」を信じた人たちの側からすれば、真理を求めた結果として行き着いたところがそこだった。その後、疑問を感じて教会に来られた方もいますけどね。そこに行った人は、純粋に聖書を学ぼうと思った結果なわけで。その人たちを「関係ない人だ」とは言えません。私だって自分の信じているキリスト教が正しいと信じて、今行っている教会がまっとうな良い教会だと思って行っているわけで。私の息子が「○○教会に行く」って言ったとき、私が「そこはちょっと…」と賛成しかねるようなことを言ったんです。そしたら、「お母さんは自分が一番正しいと思ってるやん」って言われて（笑）。「いや、べつに、そうでもないけど…」みたいな。「あんたより人生経験ある分、知ってることもちょっと多いくらいかな」と思ったけれども、たしかに自分の経験から、是と非を決めてしまいがちなところが私にはあります。大人は自分の経験値からの答えを出しがちというか、経験値からこれが正しくてこれが正しくない、と言いがちだけど、それは自分の価値観によるものなので…。

ツラノ：この問題に関しては二つ軸があると思うんですね。一つは異端か異端じゃないかという軸。キリスト教的立場からすると、歴史の中で議論を闘わせてきたキリスト教の信仰・信条があるわけですから、それに照らし合わせて合っているか合っていないかってことが、宗教的な視点として入ってきます。だからキリスト教会は、「歴史的に正統とされてきたものとは違う」という意味で「異端」と言います。

店長：「異端か、異端じゃないか」の軸。もうひとつの軸は？

ツラノ：『上の人』が、絶対の正義みたいなものを錦の御旗にして、『下の人』を有無を言わさず従わせるような、虐待につながる構造を持つ宗教団体を、私達は許しません。そういう団体がキリスト教を名乗ることに抗議します」という軸。これがもう一つの軸です。

店長：なるほど。キリスト教会は、社会に対して、「私たちは、この二つの軸を明確に切り離して考えていますよ」と説明しないと、誤解されやすいということですか？

ツラノ：そう思います。つまり「キリスト教じゃないのに、キリスト教と名乗る異端＝ダメ」の軸は宗教の枠組みの中で「私たちの信じる教えは、エホバの証人や統一教会の教えとは根本的に違うんです」と「正しいか正しくないか」ではなく「違う」ということを主張する。これなら、社会も理解しやすいです。

店長：「私達こそ正しい。異端は正しくない」と主張しても、社会は反発するということですね。クリスチャンだって、たとえば仏教の正統派を名乗る宗派が「うちこそ正しいんです。社会の皆さん、わかってください」と主張したとしても、「そんなん、知らんがな」となりますよね。

ツラノ：ところが特に福音派の教会は、「異端か異端ではないか」の軸は、社会に対してやたらアピールするのに、もう一つの軸「対話と思考の余地を持たず、子どもへの虐待や経済的搾取が行われているような宗教団体が、キリスト教を名乗ることを許しません。彼らのやっていることに、抗議します」の方には、あまり強いアピールをしない。それは、「異端か異端ではないか」の方の軸で、もうすでにやっていると思いこんでいるのかもしれません。あるいは自分たちにも対話や思考を軽んじる傾向があるからかもしれません。

ねぶ：キリスト教を名乗る『異端』の宗教団体の教えには、人権を尊重しない、虐待も生じやすい、カルト化しやすい傾向があるのでは？ここは、私達もよほど注意しないと、「正統なキリスト教会」だったはずが、いつの間にかカルト化し、パワハラや虐待の温床になっていたということは、今までもたくさん例があります。

ツラノ：私としては、自分の視点から見て正しいと思うキリスト教を信じているので、そうじゃない信仰を持っている人をただちにジャッジしようとは思わないんですけれども、ただそのやっている内容が、本当にイエスがやったような内容だったんだろうかっていうところで考えたいと思いますね。イエスは子どもを中心に「この一番小さい者を…」という立場ですよね。子ども達を真ん中にしておられたイエス、というのが自分の信仰の中心なので。そういう視点から考えたいです。

店長：確かに、異端か異端じゃないかっていう話を社会にアピールしても、あまり意味がない。キリスト教会の中でもいろいろな教派があって、右から左まで幅広いです。そこで正しさを主張し合っても、それもあんまり意味がない。究極、自分の信じていることを信じるっていうことになるのかな。ただ、異端って言われる団体の特徴的な共通点はあるような気がします。ひとつは原理主義。「カトリックもプロテスタントも、今までのキリスト教会は間違っている。サタンだ」って主張は強い。

ブル：それから、異端は聖書のほかに「副教本」がありますよね。それによって、例えば統一協会なら「献金しないと末代まで呪われる」みたいな聖書には書いてないようなことが言われたり、エホバの証人の使ってる聖書は訳し方が根本的に間違ってるし、聖書よりも優先順位が高いものがあったら異端だと私自身は理解しているんですけれども。正しい理解を、聖書の中からしていく、っていうのが一番。「聖書を学びませんか」と言いながら聖書ではないものを学んで「イエス・キリストの十字架は失敗だった。だから人間が神の失敗を補ってあげるんだ」というのは異端。

私達が子どもたちに伝えたいのは、「地獄にいかないようにしましょう」ということ？

ブル：私がこの座談会に参加しようと思った理由は、「地獄に行ってしまう」っていう、そこで子どもを追いつめていないか、という問いかけに関心があったからです。イエスさまは十字架の上で、「私を信じなかったらお前たちは地獄に行くんだぞ」って言われたのかっていうと、そうではなく、自分を十字架につけた人に対して、「この人たちを赦してください」と言われた。イエスさまは「私が身代わりになるから、あなたたちは天国にいらっしゃい」っていうメッセージを残して死なれたはずです。それがいつの間にかスライドして、「信じなかったら地獄だぞ」っていうふうなところで子どもに伝わっている。神様は、愛のメッセージを発信しているはずなのに、いつの間にか受け取る側が「信じなかったら地獄なんだ」というネガティブなメッセージとして聞いてしまうようになっているところに問題があるんじゃないかなって思います。先日、教会学校でイエスさまの十字架のところを取り上げてお話する当番だったので、自分も学びながらすごく教えられました。「信じなかったら天国に行けない。私たちは罰せられる」というふうに、神の愛よりも神の罰の方を強調して受け止め、子ども達にもそう伝えてきたって思いました。本当に受け取るべきメッセージは違うのに。神の愛ではないものを教え込まれた宗教二世の人たちは本当に気の毒だなと思います。救いのないものを求めさせられ、救いのないところに落とし込まれて行く。

店長：そうですね。「信じなかったら地獄行き」の方が、子どもにとっては恐いしインパクトがあるし、言うことをきかせやすい、相手を縛りやすいのかもしれないという気がしてきました。「親の教える宗教を信じない＝地獄行き」という教え方は、一方的で相手になんの余地も与えない。親子の対話であったり、ふわっとした「失敗してもいいよ」とか「いつでも戻ってこられるよ」とか、ないですよね。ブルさんがおっしゃったことは、私たちがこれから自分たちの教会で子どもたちと接するときにすごく大事なポイントになってくるんじゃないかなって思いました。私たちは信仰者として、社会に対して、世界に対して何を発信していくのかというときに、「裁かれます」とか「地獄に行きます」とかいうことではなく、愛を伝えていきたいと

オンライントーク会
「宗教二世」と「クリスチャン家庭の子ども」

思いました。それから、愛の反対にあるものを否定し抵抗することも、信仰者の役割のように思います。教会がそういう場であってほしいしです。

話し足りないですが、最後に一言ずつ、感想をお願いします

ツラノ：結局「自分はなぜクリスチャンで、一番何を大事にして信仰を持ち続けているのか?」ということを考えさせられました。それで最終的に行き着いたのは、イエスが自分にしてくれた最大のことは、「隣人になってくれたこと」なんですよね。隣に来て、私と同じ目線に立って、ともに悩み苦しんでくれたこと。私は自分がイエスさまにそれうしてもらって嬉しかったから、自分も子どもたちにそれを返していきたい、次の世代にそれを返していきたいなって思ったんですよね。上からパターナリスティックに「教会でこれが教えられてるから正しい」とか「神様がこういっているからあなたはこうしなければいけない、そうしないと地獄に行くんだ」と言ってガっと押さえつけることが「隣人になること」じゃない。そうじゃなくて、イエス自身も「父よ、どうして私をお見捨てになったのですか」と神の子の立場でありながら叫んだっていうところ、そこにこそむしろ、私は救いを感じる。本当に私の隣人になってくれたんだと…。だとしたら、せめてその爪の垢でも煎じて飲んで、隣人と「一緒に考える」ということをしたいです。配達員さんが言った「一緒に考える場の重要性」ですね。ブルさんが読書会の話をしてくださいましたが、そういうふうに、上から目線じゃなくて隣に座って、一緒に考えてくれるような隣人になれたらいいなと思います。「あなたのそんな幼稚な信仰じゃ駄目よ」とか「あなたは異端だから駄目よ」みたいなことを言える立場には誰もいないはずなのに、「バッサリ」そう言えてしまうのはそもそもおかしいですが、それとは真逆の「隣人になれるかどうか」っていうところが、自分が大事にしているキリスト教信仰なんだと思いました。

ねぶ：非常に興味深い話を聞かせていただきました。一世も二世も多種多様ですね。先ほど「一世は劇的、ドラマチック」という話がありましたが、自分自身を振り返ると、これはもう幻想だとしか言えません。まあそういう人もいるとは思いますが。それから二世の人でも三世の人でも劇的な人はいるし、「なんかいつの間にやら」的な人もいるのでは?信仰は、個別で多種多様で雑多。パーソナルと言うか、非常に個人的なものだと考えるところから、二世問題も考えたいと思います。「対等」という言葉が結構出ていたと思うんですけれども、神の前では、大人も子どもも対等です。ただその時に、大人は子どもに対して良いものを提供したいと思います。民族教育なども、子どものルーツやアイデンティティとして伝えたいことがあると考える。それは、自然な人間の思いです。それは否定されるものではない。ただその時に、それが独りよがりにならないように、「はたして自分は本当に良いものを伝えようとしているのか」ということは絶えず吟味しながら、自らに問い返しながらやっていかないと大きな間違いを起こします。それが私が今日考えたことです。

配達員：僕は「本物を知る」ことで偽物がわかると考えています。ただ「これが本物なんだ」と他を一切拒絶する極端もまた、いろんな問題を生む原因になると思います。本物を教えてもらったことは、大きな財産だと思いますし、聖書には「きよさ」「厳しさ」もあると思います。同時に、神の赦し、愛が及ぶ領域を、自分の中で小さくまとめてしまっているような気がします。自分の頭や思いをはるかに超えた神の赦し・愛がどこまで及ぶのかについては、小さく見積もらないようにと考えます。

れんこん：日本ではキリスト教はマイノリティ、少数派ですが、キリスト教徒が多い国に行くと、その中でもいろんな違いがあって、いま「異端」「原理主義」という言葉が出てきましたが、それぞれをどう定義づけるかという物差しは個々に持っていると思います。イスラム教も、日本だとどうしてもキリスト教国の影響が強いところなので、「イスラム原理主義」にまとめられがちです。キリスト教の中でも聖書をゆがめるつもりがなくても、ある部分を必要以上に強調したことが、政治に利用される、悪用される、そういう現実を知っておかないといけないと思います。私たちの信仰で大事なのは、イエスさまの愛をいただいている、その部分だけだと思います。何を異端とするのかどこまでを原理主義と言うのか、政治や社会全体の問題になることを覚えて、現実にあることとして目をつむらずに、教会が知らずにやってしまったことや、よくないまま引き継いでしまっていることから目を背けない。やはり多数派の力の原理で教会も動く傾向があります。性的少数者への配慮、その人たちの尊厳を踏みにじっているという現状にも向き合って知り、本当に大切に引き継いでいきたものを引き継いでいきたい。そのことを日々教えていただきながら、生かされたいと思いました。

ブル：今日はいろんな視点を見せていただき、聞かせていただいたので、また帰ってゆっくり考えたいです。私は二世で、キリストの中に初めから入っていたような人生なんですが、自分がキリスト教とは無関係のところにいたらキリスト教を選んでなかったかもしれません。石橋を叩き割ってしまうようなタイプで、絶対に橋を渡れないと思うんです。だから初めからそこに置いていただき、神様を知る人生になったことをとても感謝しています。教会学校の男の子が、教会学校の「みんなで分かち合いをする時間」がいやだと言っていると親御さんから聞いて、「じゃあ、分かち合いはやめましょう」という話になりかけた時に、ある先生が、「いや、その子が嫌だっていうから止めちゃうんじゃなくて、人生にはいろんなことがあることを経験して、考える時間があってもいいんじゃない?子どもがいやだとかツライとかしんどいと思うことを、大人は全部排除しなくてもいいんじゃない?」と。それでみんなであっさり「しつこくやりましょう」という話になったんですけど。「寄り添う」というのは、別に「嫌なことしない」ってことでもないと思うんですよね。いろんな気持ちを人生の中で感じることは大事です。大人として次の世代に渡していく良いものがどんなものなのかを考えながら、信仰のバトンを渡していきたいなと思います。良いものは子どもたちに知っていてほしい、信じるべきものを信じてほしい、あらためて思いました。

コンチ：「晒される」必要性をすごく感じました。自分が正しいと思っていることが本当に正しいのかどうか、自分が見たいものや聞きたいものを選択して取り込んでいないかどうか、その自分の弱さは自覚しないといけないし、晒されないといけないと思いました。親が「これがいい」と思っていることでもやっぱり晒される機会が必要です。晒される環境の一つが教会なのかもしれません。自分自身が不完全な者であるというところに立って、自分の行動も晒される必要があります。ツラノさんの言う「行動としての愛」ですが、行動すれば批判も受けます。そこで一度立ち止まるということも、大事ですね。一方的によいと思ってしたことが愛にならないこともある。行動して目に見える形になり、晒されることは、痛いことだけど本当に必要なことだなと思います。

店長：ありがとうございました。私も、安心して晒していくことができる教会であってほしいし、社会であってほしいと思います。今は、晒したとたんに、袋叩きにあうみたいな世の中になっていると思います。晒して、そこでまた練り上げていく、自分にない考えを聞き、取り入れて新しい発想が生まれ、新しい発展がある。そういう教会の姿を、隠すのではなく社会に晒していくということを、二世問題と向き合うときにも考えていったらいいのかなと思いました。今日はありがとうございました。(おしまい)

オンライントーク会
「宗教二世」と「クリスチャン家庭の子ども」

古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。（受付できないものもあります）で事前にお知らせください。ご事情により当店より回収に行かせていただくこともあります。ご相談ください）

【献本をお願いしたい本の種類】

1　キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
2　哲学、心理学等、人の生き方に関する本
3　社会の中で起きている問題を扱った本
4　暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
5　小説（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
6　漫画（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

百科事典・辞書・開封済みのCD・DVD・月刊誌・週刊誌等は受け付けておりません

【本の送り先】

住所：〒607-8216　京都市山科区勧修寺東出町75 からしだね館
宛先：CLC からしだね書店　献本係　　電話：075-574-1001　FAX075-574-0025
Mail：clc @ karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本感謝】

柳内やすこ様、中村様、里村佳子様、**中村富枝**様、**大釜和子**様（順不同）

6 月の古書の収益は 44,845 円でした。【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】**献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思います。匿名ご希望の方は、お知らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。**

編集後記

◆６月号の編集後記をあらためて読んでみて、びっくりしました。アライグマのことしか書いてなくて、全然、編集後記になっていませんでした。申し訳ございません。◆このように、書店だよりは、いつもけっこうぎりぎりのところで発行し続けております。どうかご容赦ください。ちなみにアライグマは、あれから姿を見せません。◆今回は、宗教二世問題を考える３回目（最終回）です。宗教二世問題から見えてくるいろいろな問題が浮かび上がってきたように思います。◆読書感想本も、テーマとしては関連するものになりました。あらためてキリスト教が教育の分野で果たしてきた役割、これから果たすべき役割を考えました。◆厳しい暑さが待ち構えています。どうぞ皆様、お体大切に…。【店長】

お知らせ

★いのちのことば社オリーブスが発売する通年グッズ、カレンダー、クリスマスグッズ等は、今後、「新改訳 2017」だけでなく「リビングバイブル」や「新共同訳」等の聖句も使用した商品になっていくとのことです。新改訳聖書の著作権使用のルールが変更になったからだそうです。今後、様々な訳を使った商品が混在することになるそうですが、どの訳を使っているのかは、わかりやすいよう配慮されるようです。

お知らせ

★これから夏本番で忘れがちなのですが、**オリーブスの手帳（クリスチャンダイアリー、クリスチャンプランナー）**の予約を受け付けています。定期刊行物のある教会様には、予約表をお送りしております。昨年も、売り切れが続出しました。よろしくお願いいたします。

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援Ａ・Ｂ型事業所からしだねワークス
からしだね書店＆カフェ・トライアングル
〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町 75 からしだね館
書店電話番号　075-574-1001　ＦＡＸ　075-574-0025
書店メール　clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店だよりのバックナンバーはこちらから